

## 宣教師の書簡と伝承からみる初期潜伏キリシタン心性史

小泉優莉菜

KOIZUMI Yurina

非文字資料研究センター 2016年度奨励研究採択者  
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 本論文では、自身のテーマである〈近世期のキリシタン信仰の心性史研究〉の一環として、宣教師たちの書簡を中心とした調査をまとめ、その考察を行った。筆者はこれまで、綿密なフィールド・ワークを基にして、現代のかくれキリシタン信仰の研究を行ってきた。現在の彼らの特異な信仰形態は、潜伏期にキリシタンたちを取り巻いていた環境とそれらとの文化摩擦から生じたものである。「取り巻いていた環境」とは、「幕府」「庶民（町人・農民）」そして「宣教師」たちである。彼らが潜伏下のキリシタンとどう向き合い、伝道を行ったのかについては、資史料調査からも明らかにすることができる。文字として記された当時の状況から、「文字では記されなかった」心性についての考察を進めるのが、筆者の書簡研究の目的である。

本論文での分析から、従来のキリシタン信仰史の区分の再考を促すことができた。本論文で扱った時期は、前述の区分でいう「キリシタン期」と「潜伏キリシタン期」の中間の時代である。キリシタン弾圧が始まる中、信仰を隠す者と「信仰の魂を見せる」とし、信仰を告白して、処罰される者などが入り混じった時代である。そのような歴史的背景を持つ時代であるため、本論中で扱った時代を、「過渡期」という一時代と考えることもできるのではないだろうかと述べた。

そのように、宣教師の書簡研究は、従来のキリシタン信仰史に新たなアプローチを可能にするものであるといえよう。折しも、2017年1月21日に遠藤周作の小説『沈黙』をマーティン・スコセッシ監督が映画化した『沈黙——サイレンス——』が劇場公開され、キリシタンの中でも、特に江戸期の潜伏キリシタンと宣教師との関係について国内外で注目が集まりつつある。宣教師たちが潜伏下のキリシタンとどのように向き合い、伝道を行ったのかを明らかにした本研究は、それゆえに、キリシタン研究という領域にとどまらず、今後のキリシタンに関する認識をより事実に基づいたものにするための第一歩であったといえる。

The history of mentalities of early Senpuku Kirishitans as seen  
from letters of missionaries and oral tradition

**Abstract** : As part of the author's research theme on the history of mentalities of modern-era Kirishitan (Christian) beliefs, this paper presents the results of study and analysis of letters and materials written by missionaries. Until now, meticulous fieldwork has been the basis of the author's study of contemporary kakure Kirishitans (hidden Christians). Their current unique form of belief developed from the circumstances which forced them to go underground, along with the cultural frictions that resulted from their situation. Those involved relationships and

interactions with the bakufu (shogunate government), commoners (townspeople and farmers), and missionaries. The letters and documents left by the missionaries reveal the way they interacted with the Senpuku Kirishitans and of their missionary activities. My goal in researching the written materials of this period is to cast light on the history of mentalities which were left unrecorded in written form.

As an outcome of the analysis presented in this study, the author urges a reconsideration of the presently designated historical stages of Kirishitan beliefs. This study covers a period between the Kirishitan and Senpuku Kirishitan stages. The persecution of Kirishitans began in this period; some responded by concealing their faith while others confessed their belief and accepted punishment as a “demonstration of the Christian soul.” With this historical background, the author suggests that this period can be viewed as a transitional stage between the two currently designated stages.

Therefore, the study of the missionaries’ letters can be called a departure from traditional research methods and indicates a new approach in understanding the history of Kirishitan religion. Coincidentally, the movie “Silence,” which was directed by Martin Scorsese and is based on Shusaku Endo’s novel “Chinmoku,” premiered on January 21, 2017, and the relationship between the Senpuku Kirishitans and missionaries in the Edo period is particularly beginning to attract interest, both in Japan and abroad. This study has enabled a better understanding of how the missionaries interacted with the Senpuku Christians and engaged in missionary activities, and thus reaches outside of the academic boundaries of Kirishitan studies and can be described as the first step in gaining a more realistic understanding of Kirishitans.

## はじめに

本論文では、自身のテーマである〈近世期のキリシタン信仰の心性史研究〉の一環として、宣教師たちの書簡を中心とした調査をまとめ、その考察を行う。筆者はこれまで、綿密なフィールド・ワークを基にして、現代のかくれキリシタン信仰の研究を行ってきた。現在の彼らの特異な信仰形態は、潜伏期にキリシタンたちを取り巻いていた環境とそれらとの文化摩擦から生じたものである。「取り巻いていた環境」とは、「幕府」「庶民（町人・農民）」そして「宣教師」たちである。彼らが潜伏下のキリシタンとどう向き合い、伝道を行ったのかについては、資史料調査からも明らかにすることができる。文字として記された当時の状況から、「文字では記されなかった」心性についての考察を進めるのが、筆者の書簡研究の目的である。

なぜ、この資史料調査が必要かという点、自身のこれまでの研究から、宣教師の伝道方法がキリシタンたちの信仰実践に影響を与えたと推察しているからである。実際、かくれキリシタン信者たちの言い伝えの中には、「A 地区は弾圧が激しくなる前に、ぼどれ（神父）が後世に伝えるための整備をしたと言われている」などの証言もある。

これまで行ってきた「かくれキリシタンとその周縁の人々の心性」に関する研究によって、先行研究では触れられなかった側面に関する、新たなキリシタン研究の可能性を示すことができた。幕府と庶民に関しては、キリシタン取り調べの犯科帳や随想記や日記類などの文書から研究を進めている。問題は後者の宣教師たちの資史料である。日本に布教に来ていた宣教師たちは、本国ローマへと膨大

な書簡を送っている。

今回考察の対象とする1603年前後の書簡には、キリシタンたちや日本の様子はもちろん、宣教師たちの日本の信徒に対する見方が数多く記載されていた。これらは日本国内においては容易に参照することができないため、国立・大学付属図書館や、各教会の保有する資史料を閲覧し、翻訳した。主に、イタリア国立マルチャナ図書館にて資史料調査を行い、当時の日本の状態を、宣教師たちがどうとらえ、西洋諸国にどのように報告していたのか、について調査を進めた。本論文ではこの書簡の分析を行う。

筆者は拙稿「長崎県生月島におけるかくれキリシタンの「唄おらしょ」——生月島山田地区の事例研究一」（2015）において、かくれキリシタンたちが伝承している「唄おらしょ」の多角的な考察を試みた。その結論として、詩の解釈は様々にできるものの、少なくとも当時の潜伏キリシタンたちの信仰がどの程度聖書に則っていたかは明らかにすることができた。先行研究でいわれているように「殉教者を偲んで唄われている」「将来は信仰の自由がやってくることを願う」唄であると共に、キリスト教で最も大切にされている『聖書』の内容を隠し持つ、本来は教義を伝えるための唄であったという仮説を立て、それが正しいのだとすれば次の二つのことが言い得るとした。

一つは、その成立の年代である。歌詞を見てみると先述しているようにキリスト教の教義が織り込まれたものとなっている。明確な年代の特定はできないものの、そのことからこの2曲は、潜伏期中でも早い時期に作られたのではないかと考えることができるのである。

二つ目に考えられることは、キリスト教からかくれキリシタンへの変容の様子である。彼らの信仰の伝承能力はとても高いものであり、当初はキリスト教の教義に則った唄として伝えられていたものが、現在ではその意味が分からなくなってしまったものの、「かくれキリシタン」の唄として伝えられている、ということである。当時はキリスト教の教義の中での重要な意味を持っていた唄が、現在ではかくれキリシタン信仰の中で、「歌詞」ではなく「存在そのもの」が重要となったのではないかと考えられる。キリスト教からかくれキリシタンへの変容の過程を、唄からも読み取ることができる

《だんじく様のお唄》

(んー) 参ろうやな参ろうやな  
「ばらいぞ」の寺にぞ 参ろうやな  
「ばらいぞ」の寺とは 申するやな  
広いな寺とは 申するやな  
広いな狭いは わが胸にあるぞやな  
(んー) しばたやま しばたやま  
今はな涙の 先なるやな  
先はな助かる 道であるぞやな

《だんじく様のお唄》意識

さあ行こう。  
「ばらいぞ」という天の国にある寺へ。  
そこは広い寺であるらしいけども、聖書に書かれているように、広いか狭いかは自分の信仰心によるものである。  
「ホレブ山」で神は託宣をモーセに与え、イスラエルの民は自由を手にしたという。私たちが今は辛い弾圧に、涙を流しているが、強い信仰心を貫けばイスラエルの民と同じように自由な道を歩くことのできる日が来るのだ。

とした。

また、そのような仮説によって、かくれキリシタン信者たちの唄い継いでいる唄おらしょを次のように読み替えることが可能であるとした。

それではそのような仮説が正しいとするならば、江戸当時のキリシタンたちは、どの程度信仰に精通し、教義に則った信仰活動が出来ていたのだろうか。それを探る手掛かりとして、“Lettera annua del Giappone”は有益な史料である。日本で宣教活動を行っていた宣教師たちは、本国ヴァチカンへと、大量の書簡を送っている。潜伏期におけるキリシタンへの弾圧が過酷なものであったことは、人口に膾炙している。斬首や火炙り、水責め、そして最も過酷であったといわれる穴吊りなど、日本史上でまれに見る、宗教的迫害がそこでは行われた。当時の弾圧に関する資史料は、幕府が書き記した記録が主であった。しかし、それは権力側が書き記した記録であり、そこから、当時のキリシタンたちの心性を考察することはできない。果たして、「キリシタン」としてその生涯を終えることは、キリスト者にとってはどのような意味を持ち、また、どのような心境の中、彼らは逝ったのだろうか。そのことを知る手掛かりの一つとしては、宣教師によって書かれた文書がある。

今回筆者は、イタリア国立マルチャナ図書館での資史料調査と翻訳から、弾圧期当時のキリシタンたちの様子について情報を得た。その報告書からは、潜伏期の直前・直後の「宣教の方法」「日本社会の様子」「信徒たちの様子」などを知ることができる。本論文での考察によって、これまで自身の進めてきた、唄おらしょの歌詞の分析がより深化することが予想される。以下の分析はその調査を基にしたものである。また、“Lettera annua del Giappone”は、『イエズス会日本年報』として、村上直次郎により翻訳されているが（村上1969a, 1969b）、心性史の研究に際し、筆者自身によって再度翻訳を行うことで、さらに微細な心情の変化や状況の解明を行うことができた。

その中でも本論文では1624年の資史料を主に取り上げる。また、紙幅の関係でこの年の文章の全ての訳は扱えないため、前半の神父を含む165人についての弾圧の様子を主に取り上げたいと考える。

本論文の構成は、第1章において、伴天連追放令と禁教令についての年代の確認と、本論文内での、「キリシタン期」・「潜伏キリシタン期」・「かくれキリシタン期」についての区分けを述べる。

第2章では、本論文において考察する“Lettera annua del Giappone”の翻訳を挙げる。続く第3章において、翻訳作業から見えてきた当時の状況について考察する。また、2章では内容のまとめり毎に数字での整理（①②③……）をし、3章において論じる際の目印とする。

## I 伴天連追放令及び禁教令

キリスト教が伝来しその布教活動を広げていった背景には、伝来当時の権力者である織田信長や、その信長の意思を引き継いだ豊臣秀吉による庇護があったことは一般に知られている通りである。しかしその体制は1587年の伴天連追放令を皮切りに弾圧体制へと変化してゆく。

その体制の変化は、徳川家が権勢を握ったのちに起こった。つまり、徳川幕府が布かれたころの時期に転換期が訪れたのである。江戸時代には計5回の禁教令（鎖国令）<sup>(1)</sup>が出されている。初期段階である伴天連追放令では宣教師（バテレン）の国外追放のみにとどめているところを、この5回にわたる禁教令では宣教師を見つけ、通告した際には報奨金まで出すとしていることから、それだけ民衆

の間にキリスト教が広まっていたということが推測できる。

このような時代がかくれキリシタンの歴史におけるキリシタン期から潜伏キリシタンの時代である。伴天連追放令と違い、宣教師の国外追放だけではなく民衆の信仰も禁止していた。これこそが「禁教令」といわれる所以である。幕府によりキリスト教信仰を禁止された民衆の辿った道は二つに分けられる。一つが棄教し、寺の檀家や神社の氏子となる場合と、もう一つが幕府の目から逃れ、隠れながらも信仰を続けてゆく場合である。そして、後者を「潜伏キリシタン」と現代では呼ぶ。

キリシタン期・潜伏キリシタン期を経て、成り立っているかくれキリシタン信仰についてさらに知るためには、果たして、どのような心性下でこの信仰が伝承されてきたのか、ということについて知る必要がある。キリシタン間の言い伝え・伝説、幕府側の記録史料、そして、宣教師の文書の資史料調査をすることで、これまで以上に多角的にかくれキリシタン信仰を見る足掛かりとなろう。

それでは次節からは実際に宣教師の記述を読み、そこから当時のキリシタンの様子を考察してゆきたい。

## II “Lettera annua del Giappone” の<sup>(2)</sup>翻訳

1624年の報告書は以下のような文面で始まり、弾圧の激化が始まってきたことと、この報告書で主に報告される、ある大弾圧のことについて述べられている。

### ① “MOLTO REVERENDO in Chri[s]to Padre.”

TORNA la feconda terra. Della Christianità del Giappone aprour nuoui a me. Copio[s]a materia per l'annua pre[s]ente, nella quale darò a Vo[s]tra Paternità ragguaglio con la breuità po[ss]ibile con[s]orme al [s]olito, di quanto è [s]eguito.

“Dello [s]tato temporale del Giappone, e della Chri[s]tianità di e[ss]o.”

SE bene il Xgun di Iendo Signor del Giappone ha la[s]ciato colgouerno, la dignità di xogun al figlio, pa[ss]ando egli ad vn'altra maggiore, tuttauia non è [s]eguita mutatione nelle co[s]e de'Chri[s]tiani come [s]I de[s]ideraua, e[ss]endo[s]i mutate Gouvernate: poichè il figlio non punto di[ss]erente dal padre in odiarli, è [s]tato cagione della morte di molti. Il numero è il maggiore di quanti [s]iano [s]tati fin'hora, poichè dal Decembre del 1623. fin'al Nouembre del 1624. [s]ono morti con varie [s]orti di tormenti cento [s]e[ss]antacinque Chri[s]tiani, otto de'quali erano Religio[s]i di S.Domenico, di S.France[s]co, e della no[s]tra Compagnia, & il re[s]to [s]ecolari, nuomini, donne, e fanciulli, de' quali [s]iragionerà a [s]uo lungo.

「神父の挨拶」

日本ではキリスト教にとって新たな時代に突入している。そのため、私はこれから、それらのことについて短く伝える。

「日本という国と日本のキリスト教について」

江戸の将軍が息子に将軍職を託したが、キリスト教の立場は変わらなかった。なぜかという、彼もまたキリスト教が嫌いであったからである。彼のせいで日本のキリシタンたちは大勢死んだ。今年は今までで最多で、1623年の12月から1624年の11月までの間に、様々な苦難により、165名のキリシタンたちが殺された。彼らの中の8名は、S. Domenico と S. Francesco、そして私の団体〔Jesuiti〕の人であった。残りの男女・子供の細かいことは後にする。

② Leuo[ss]I questa per[s]ecutione in Iendo Crte del Xogun ade[ss]o capo del Giappone, e talmente [s]i [s]par[s]e, che non vi [s]ù contorno habitato da Chri[s]tiani, che ò poco, ò a[s]iai non [s]enti[ss]e il rigor di quella. Molti erano ammazzati, molti [s]errati in prigione, e molti mandati in e[s]ilio. Si a[s]condeuano molti fuggiuano dale proprie ca[s]e, per non habitare in compagna de' Gentili con pericolo di rinegar la Fede, e molti [s]orti, e co[s]tanti in mezzo di gente peruer[s]a [s]i mo[s]trauano pronti a patir qual[s]iuoglia morte, animando i fiacchi, de' quali fra tanti [s]e ne troua [s]empre qualcheduno, a confe[ss]are genero[s]amente la fede di Giesù Chri[s]to. Non [s]i può ridire la paura, che nacque in varie parti dal rigore di que[s]ta per[s]ecutione, ma[ss]ime [s]oprugiungendo ogni di nuoui mini[s]tri, che per ordine del Xogun taceuano ogni sforzo per far ritornar indietro li Chri[s]tiani procedendo contra tutti con varie forte di minacce, e di tormenti. Le diligenze per [s]coprire i Religio[s]i doue andauano, e le [s]trettezze v[s]ate per impedir loro l'entrata nel Giappone, erano in quell tempo [s]traordinarie. Impedirno è vero que[s]te co[s]e, vna gran raccolta, poichè non [s]i battezzorno in tal tempo per mano de'no[s]tri, e d'altri, che a que[s]to aiutano, [s]e non alcune migliaia; ma [s]periamo che dal [s]angue di tanti Chri[s]tiani irrigate que[s]ta terra, darà più copio[s]a me[ss]e negli anni a venire.

現在では、「将軍から迫害を受けていない」と感じないキリシタンはいない。それほどまでに彼の迫害は厳しさを増していた。様々な処刑が行われ、多くの投獄や流罪がなされた。キリスト教に関わる様々なものを隠し持っていた家から逃げ出す人もいた。<sup>(3)</sup>なぜかという、異教徒と住むことにより、信仰がゆらぐ恐れがあったからである。彼らの中には勇気がある者もあり、怖がるキリシタンに対して、自身の魂によって人に希望を与えるために、自身がキリシタンであることを何者にも恐れることなく話す者もいた。迫害のせいでキリシタンたちに起こった恐怖は言葉では表すことができない。毎日将軍から送り込まれてくる役人は、キリシタンを脅し、拷問し、キリスト教を棄てるよう迫っている。神父は皆、どこにいるか、何をしているのかということに管理され、また、新たな入国はできなくなってしまった。このようなことが災いし、私たちはたった1000人ほどの改宗者しか出すことができなかった。しかし、迫害によって流されたキリシタンたちの血の海は、新たなキリシタンたちを生み出すであろう。

③ e la mattina [s]eguenta allo [s]quartar dell'alba, col [s]uo compagno [s]i pre[s]entò al Governatore, il quale hauendoli interrogati di varie co[s]e, finalmente li [s]ece incarcerare.

Seppe noua della querela datali il Padre. Fra France[s]co Galbe, eperò [s]i ristirò a Camacura

lungo di[s]tante vn giorno da Iendo, ma volendo[s]i imbarcare per vn'altro lungo, [s]coperto dale [s]pie, [s]u legato e condotto in prigione con altri Chri[s]tiani, alcuni giorni dopo il Padre de Angelis. Il principale de'Chri[s]tiani pre[s]i col P. Francesco [s]u Ilario Mongazaiemon da Camacura, per[s]ona ricca e molto nobile. Fù a[ss]alito Ilario, mentre [s]taua per e[ss]er [s]atto prigione, da I parenti, I quali con varie [s]tratagemme cercorno di ritirarlo dal [s]anto prop[s]ito; ma tutto in vano; perchè [s]empre con[s]tante ricusò tutti li partiti, che gli proponeuano, e con gran liberalità offeri la [s]ua robba per amor di Dio a' [s]eruitori in ca[s]o che fo[ss]e morto, in [s]egno di che remi[s]e a cia[s]cheduno varie [s]omme di denari, quali gli doueuaano. Gli [s]ù propo[s]to, che almeno cò parole in tal nece[ss]ità, mo[s]tra[ss]e di non s[ss]er Chri[s]tiano: [s]i [s]egnò il [s]eruo di Dio a[ss]ai, & affermò co[s]tantemente, che [s]e bene gli fo[ss]e per co[s]tar la vita, non hauerebbe mai nè conparole, nè con fatti negate la fede del [s]uo Redentore. [S]ù con lui pre[s]a la maglie, la quale comparue con le più ricche ve[s]ti, che haueua. La ripre[s]e Ilario dicendo, che le co[s]e migliori [s]i doueuaano la[s]ciare per offerirle a Dio: ma la donna non meno del marito magnanima, e genero[s]a ri[s]po[s]e: La mia intentione è di honorar Iddio con gli habiti di fe[s]ta, in [s]egno che ci ralleghiamo, e ricogno[s]ciamo, che non poteuamo hauer gratia, nè riceuer allegrezza maggiore, che d'e[ss]er fatti degni di e[ss]er imprigionati, e dar la vita per la [s]ua [s]anta legge.

〔この前の記述は、P. De Angelis は潜伏先を密告され、匿っていた主人を助けるために、役所へと自らが行くことを決心した、という内容が記されている〕。次の朝、日の出と共に Giovanni と一緒に役所に行き、色々と質問を受けた後、結局、投獄されることとなった。Fra Francesco Galbe はこれを聞き、江戸から1日離れた鎌倉で潜伏することとした。そしてそこから別の国へ出る機会を待った。しかし、役人に見つかり、捕縛され、P. De Angelis と共に投獄されることとなってしまった。その時、P. Francesco と共にいた Ilario Mongazaiemon は金持ちの貴族であった。Ilario Mongazaiemon は捕まった時には、P. Francesco と共に行こうということを決めていた。彼の家族が考え直すように言っても無駄であった。そして家来に、自分が死んだ時には全てのものを与え、借金でさえも返さなくとも良い、と言った。家族が「キリシタンではないと言ってくれ」と頼んでも、いつでもこれについて怒り、「言葉も体もキリスト教を棄てることはない」と断言した。結局は彼と一緒に彼の妻も捕まってしまった。Ilario Mongazaiemon は妻に、「良い着物を着て神に捧げられるべきだ」と言った。妻もなかなか、度量の大きな女性であったので、「キリシタンとして捕まり、キリスト教信者として死ぬことはうれしいことだ」と言って良い着物を着、身だしなみを整えたのであった。

④ “Come i [S]opradetti cinquanta Chiristiani surno vini arrostini per ordine del Xogun.”

Tornato il Cubò da miaco a Iendo, gli [s]u dato conto del [s]ucce[ss]o de'Chri[s]tiani, e gli [s]ù chie[s]to, che ri[s]po[s]e, che ciò domanda[ss]ero al nouo Xogun [s]uo figlio, a cui apparteneua. Commandò allora il Xogun, che tanto li Sacerdoti, che haueuano predicato, quanto gli altri che aueuano brracciata la fede di Chri[s]to, [s]u[ss]ero abbrugiati viui. Marauiglio[s]a [s]ù l'allegrezza

de'Chri[s]tiani quando hebbero la noua della crudere [s]entenza. Il P. Girolamo de Angelis, che alcuni giorni prima della per[s]ecutione era [s]tato più volte [s]entito e [s]clamare: Chi mi concederà, ch'io mora abbrugiato per Chri[s]to, [s]ù ritrouato da vn [s]uo amico, che lo vi[s]tò, con vna faccia tanto allegra, che non [s]i può ridire. Con altrettata allegrezza [s]taua li P. Fra France[s]co, e tutti gli altri col Fratello Simone, del quale habbiamo [s]aputo, che di tanto in tanto e [s]clamaua: Cupito di Bolui, & eß cum Chisto. Vennero al fine alli Quattro di Decembre la mattina li mini[s]tri della giu[s]titia alla prigione, per e [s]egure la [s]entenza del Xogun, & il primo, che ne cauarono, [s]ù il Padre de Angelis, al quale leuorno li ferri da' piedi, gettandogli in vece di s[ss]i un agro[ss]a fune al collo, con cui gli legorno ancora le mani dietro.

「将軍の命令で、50人のキリシタンが生きのまま焼き殺されたことについて」

公方様が、都から江戸へ戻ると、キリシタンが増えたことをどうするか、という議論が起こった。彼はこれを将軍である息子に任せた。そして、彼の命令で、新しいキリシタンたちは生きのまま殺されることとなった。この厳しい判決を聞くと、キリシタンたちは皆喜んだ。なぜかという、彼らは P. Angelis から、「神様の為に生きのまま殺されることは幸せなことである」と言っていたのを聞いたからである。同じように Fra Francesco Simone も皆と共に喜んだ。Simone は時々、「死はキリストと共にある手段である」と言った。結局、12月4日の朝、将軍の命令を実行するために役人が来た。最初は、P. Angelis であった。彼の足の鎖は取られたが、大きなロープで首を巻かれ、そして、同じロープで後ろ手に縛られた。

⑤ Si diede finalmente foco alle cata[s]te, e nel cominciar[s]i ad accendere, furno [s]entiti tutti gridare a gran voce Giesù Maria. Non [s]i può ridire l'inuitta co[s]tanza, con la quale [s]o[ss]irno quel feroce tormento. Non vi [s]u pur'vno frat anti, che ò [s]i lamenta[ss]e, ò de[ss]e pure vn minimo [s]egno di dolore, mo[s]trandolo almeno nel volto. Cagionò fortezza tanto [s]traordinaria merauiglia si grande ne [s]pettatori, che li Gentili [s]te[ss]i cominciarono a dir tra di loro, che le forze della natura non arriuauano a tal [s]egno, poichè [s]i vede, che li condannati per li proprij delitti [s]empre mo[s]trano, che almeno qualche co[s]a de[s]iderano. Vedeuano quanto pa[ss]aua con animo intrepido li Padri, che [s]tauano a cauallo, e dando gratie a Dio, non mo[s]trorno mai di [s]pauentar[s]i, come haueuano la[s]ciati [s]oprauiere, acciochè atterriti dallo [s]pettacolo d'incendio così crudele, face[ss]ero qualche noua re[s]olutione: ma non [s]olo non cagionò [s]pauento in loro quella morte sì horrenda, anzi in[s]iamò, & animò tanto due altri, che [s]tauano a vedere, cioè vn huomo, & vna donna, che di [s]ua [s]pontanea volontà cor[s]ero al tribunal de' Giudici quando cra maggior la furia del fuoco, e gridorno pubblicamente, che erano Chri[s]tiani, e che [s]eguiano la legge profe[ss]ata da i quaranta[s]ette, che moriuano. Non furono però gettati [s]ubito come de[s]iderauano nel fuoco terreno, ardendo già di fiamme cele[s]ti, ma furno [s]i ben condotti per ordine de' Magi[s]trati egati alle prigioni, doue ri[s]tretti la[s]ciorno libero campo a quelli che li mirorno, di ammirare quanto la diuina legge po[ss]a ne' petti humani, e quanto vigore



dia il cielo a quelli, che vogliono in terra e[s]eguir [s]olamente il volere del grande Iddio.

結局火はつけられて、燃え始め、皆が「イエス・マリア！」と叫ぶのが聞こえた。その痛みを皆は強固な意志で耐えたが、それは言葉にならない光景であった。しかし彼らの中には、その痛みのせいで顔を苦痛に歪める者は、誰一人としていなかった。これを見た異教徒は信じられず不思議がっていた。まだ馬に乗っている3人も、恐れを感じているようには少しも見えなかった。役人は、人々にこのような苦しみを見せれば、人々はキリスト教に対する希望を棄てるだろうと考えていた。しかしその思いとは逆に、この一連の死を見ていた2人の夫婦は、すぐに役人の元へ行き、自身らもキリシタンであることを告白した。しかし彼らはすぐには殺されず、牢獄に入れられることとなった。彼らがキリシタンであると名乗り出たのは、皆にキリスト教の力を示すためである。

⑥ Seguitorno subito le serve; nachiamata Cecilia, e l'altra Maria, & un fanciullino chiamato Michele di età di tre anni; il quale come non sapeva ancora temere, non volendo star nelle braccia di chi l'haveva portato fin li, se n'anuò alla volta di sua madre Cecilia, polta gia nel luogo doveva esser decapitata, la quale abbracciando amorosamente il figlio, e con molta divotione dlcendo Giesù Maria, sù decapitata da un seruitore del Tono, che col primo colpo tagliò la testa alla madre, e col secondo all'innocente figlivolino. L'ultima sù l'altra serva Maria, che senza paura di tanti morti, postasi in ginocchioni, e chiamando con gran sentiment in suo soccorso Giesù Maria, diede lasua, che le sù taglitata di età venti, due anni.

Maorti li serui di Dio, presero li Gentili le store, e coprirno con quelle li cadaveri, ma nel voler coprire quello di Maria moglie di Gabrielo, trovorno, che non solo stave il capo non diviso del tutto dal busto, ma che ancora diceva Giesù Maria. Non cessò la serva di Dio con con haver la maggior parte del collo tagliata, essendo più morta, che viva, d'inuocar quei soavissimi nomi, che danno la vita a I morti, se non volessimo dire, che dopo morta per consusuione de'Gentili, il Creatore del tutto parlò per quella. Rimasero attoniti a tal vista, & a tali voci li Gentili, ma seguirno pure nella sua crudeltà, decollando di nuovo la serva di Dio: & inuolti i corpi di ciascheduno nella sua stora, attaccato ad ogn'vno di quelli un gran sasso presi, e tenutui in veneration da'Christiani.

Cecilia と Maria と 3 歳の子供の Michele という召し使いと子供がいた。Michele は子供で死の意味が分からなかった。彼は Cecilia に抱きつき、Cecilia は彼を抱きながら、首を刎ねられた。1 打撃目は母の首を切り、2 打撃目で彼の首を切った。その後は Maria であった。彼女はたくさんの遺体に囲まれながらも恐れなかった。彼女もイエスとマリアの名前を叫びながら、22 歳で殺された。神の奴隷が死んだ後、異教徒はその遺体を目につくところに置きたくはなかった。Gabriere と妻の遺体を覆おうとしたが、妻の遺体は命を切り取られてはおらず、未だにイエスとマリアの名前を言い続けていた。

これは奇蹟であった。これは神の声であった。異教徒は驚き、その神の奴隷の首をもう一度切った。そして遺体の一つずつ袋に入れ、海に投げた。なぜかという、遺体をキリシタンが拾って、遺

体のために祈らないようにするためである。

⑦ Erano tutti questi servi di Dio native dello stato di Firando, seinacquero nella città, due nell'isola Igisuqui, che erano le serve, e Maria moglie di Gabriele in un luogo chiamato Xixi. Maria la vecchia si battezzò adulta, e sù de'primi, che riceversero il santo Battesimo nel Giappone: gli altri tutti erano Christiani dale falce, nati di padri, & avi Christiani, battezzati tutti da Padri della nostra Compagnia. La vecchia Maria sempre attese alla devotine, & all'elemosine. In tutto questo l'imitò Gratia, aggiungendovi un gran zelo dell'anime, che sempre in lei si vidde verso li Christiani di quella città. Era della Copagnia della Misericordia, di qui havendo ella cura come capo, procuro con vai mezzi che la Chistianità fosse promossa nelle virtù. Alloggiò gran tempo inostri in sua casa, e si difi-  
clinava spesso, e digiunava tutti li Venerdi, e Sabbati dell'anno. Visiava, e consolava gli ammalati & aiutava li poveri in quello che poteva, e nelle feste di Natale, e Pasqua soleva conuitar li Christui-  
ani, e deva loro buoni consigli:

avvenne, che nel di dell'anno nuova de'Giapponesimorirno due infermi, uno Cittadino, e l'altro for-  
estino; lo seppe Gratia, e senza far conto, che in quell giorno appresso I Giapponesi non si possono  
nominare li moriti, non che trattar di fotterarli, fece seppellire il Cittadino, & acciochè non facessero  
rumore li Gentili, tenne il cadavero del forastiero in casa propria per non sò che giorni, e poi lo sot-  
terò nel Cimiterio de'Christinani, approvorno tanto li Gentili quest'opera di pietà, quando lo risep-  
pero, che non sapevano cellare di lodare a piena bocca li Christiani. Imitavano le due figlie Mariae  
nelle buone opera la madre, e Lino non era inferior a gli altri in tutte le virtù, facendo a alter due  
serve, che nel desiderio di morir per Christo non cedevano alle padore. morirno sfinalmente tutti  
per la fede di Christo alli 3. Di Marzo 1624. Per commandamento di Massura Figendono Signor dello  
stato di Firando.

その神様の奴隷は皆、平戸出身だった。6人は平戸の町で生まれた者であり、その中の使用人は、  
生月島の出身であった。Gavriareの妻はShishiという場所で生まれた。老婆Mariaは年を取ってか  
らキリシタンとなったものであり、日本で最初のキリシタンであった。他の者たちは、赤子の時から  
ずっとキリシタンであり、私たちの団体の神父が洗礼を授けた。年取ったMariaは、人のため、特  
に貧しい人のために働いた。Graziaもそのように働き、さらに熱心に信仰した。町の人もさらに熱  
心にキリスト教を信仰した。彼女は慈悲の心のリーダーであった。彼女のおかげで、その町のキリシ  
タンは様々な行動を起こした。我々の団体の神父は彼女の家に住んでいた。彼女はしきりに告白をし  
た金曜日と土曜日は食事を取らなかった。そして彼女は病人を訪ね、慰めも行ってた。クリスマス  
とイースターには家へ招き、ミサをした。

ある正月、町に住む人と、他から移住してきた者の2人が死ぬという事があった。彼女はこれを聞  
くと、日本の習慣では、正月の間は行ってはいけないとされる葬式を行わせた。そして異教徒には知  
らせず、遺体を自身の家に隠しておき、最後にキリシタンの墓地へと埋めた。Graziaの優しさを異  
教徒たちは知り、キリシタンを大声で褒めた。2人のMariaたちも、LinoもGavriereの妻も、その

ような母を称えた。そして使用人も主人と同じように熱心なキリシタンとしてキリスト教を信じ、キリシタンとして死にたいと思った。彼らはキリスト教のために、平戸の大名である松浦（Matura）殿の命により、1624年の3月3日に死んだ。

### Ⅲ “Lettera annua del Giappone” からの当時の状況の考察

① ここでは「165名のキリシタンたちが殺された」となっている。この年の書簡には主にこの弾圧についての報告がなされており、彼らにとってこの幕府の弾圧がいかに彼らに衝撃を与えたかが分かる。書簡に述べられているように、後にこの処刑のされ方や男女年齢の内訳は詳述されるため、筆者もこれらについては後述するが、「キリスト教排除」の動きは弾圧初期から厳しく、それは老若男女問わず行われていたことが分かる。また、子供の処刑者もいたことから、この時期の日本においては、キリスト教が個々に根深く浸透しており、苦難の中も信仰を棄てることなく貫いていた様子を知ることができる。

② 日本史上最初の禁教令は、1633年のことだったといわれている。その前身として1587年に伴天連追放令が出され、宣教師の自由な渡航が禁じられていたことは既に述べた。しかし、これはあくまで宣教師の渡航の禁止が主であり、キリシタンへの弾圧は、禁教令発布以降であったといわれている。しかし、神父のこの記述からは、キリシタン弾圧はこの時代から厳しく行われていたことが分かる。

また、そのような状況の中でも、キリシタンであることを明らかにする者も中にはいたことが分かる。日本史上でいわれているように、弾圧が行われていなかったわけではないが、若干の余裕はあったのだろう。そのため、当時のキリシタンたちは、まだ「潜伏」という状態にまでは陥っていなかったことの確認もできる。

この文の中で重要な点は、「神父は皆、どこにいるか、何をしているのかということ和管理され、また、新たな入国は出来なくなってしまった」という一文であろう。後の記述にも出てくるが、一部の潜伏した神父以外は居場所を管理されていたようである。しかし、その「管理」はほぼ「投獄」と同義であったことが後の記述から分かる。これについては後述する。

続く文章では、「私たちはたった1000人ほどの改宗者しか出すことができなかった」と述べられている。このように弾圧が始まっている日本において、1000人もの改宗者がいたということにはわかには信じがたい。しかし、「本国への報告上」という条件を考えれば、やむを得ない記述なのである。

③ 宣教師たちにも弾圧の手が広がっていることが分かる。この年より前の記述によると、幕府に教会を破壊されたり、仏教僧に土地から追い出されたり、という困難があったことは様々に語られているが、この1624年に入り明確に「弾圧」という局面を宣教師たちも迎えた、ということが分かる。また、P. De Angelisらが投獄されたことを聞き知ったP. Francescoは追っ手を逃れるために江戸を離れ、鎌倉に下っている。この地でも熱心な協力者を得ている。当時、キリスト教がどの地区にどの

程度広まっていたのかについて、正確な統計は現時点では分かってはいない。しかしこのことから、関東近郊には当時は、キリシタンが多く存在したことが確認できる。この後の時代では関東においてキリシタンが出てくることはない。それだけ弾圧が激しく、厳格に行われていたことが分かる。

また、この文の最後において、Ilario Mongazaiemon という人物が登場するが、まずこの人物がどのような人物かについて考えてみたい。原文では“per[s]ona ricca e molto nobile”となっているが、直訳すると「金持ちで高貴な貴族」となる。ここでいう「貴族 nobile」は、当時の日本社会における貴族たる「公家」であると解釈することも可能ではあるが、その名称「モンガザエモン」が公家の名前であるとも考えにくい。武家である可能性も留保する必要があると思われるが、少なくとも、社会の階層の高位に位置していたことだけは確かであると思われる。

この部分では、その「貴族」である Ilario Mongazaiemon とその妻が投獄されることに対して、身だしなみを整え、その時を待つ状況が記されている。この行為はキリスト教の教えの中の「神の前では身だしなみを整える」ということに起因していると考えられる。そのように繊細な教えにまで精通していたことから、当時のキリシタンたちの教義に対する教養の高さが分かる。キリシタンたちのそのような教養の高さは書簡の至る所で語られている。例えば、この20年ほど前の1603年の記述にも以下のような出来事が語られている。

e che tra tanto Simandono non sarebbe stato lento all'essecutione di esso; scrissero Don Protasio, e Don Sancio al P. Visitatore quanto passava in Corte, & avvisarono anche Mons. Vescovo, che meglio pareva loro, già che Daifusama haveva determinate, che si spiantassero le Chiese, prima ciò si facesse per ordine loro, che per commandamento di Simandono: percioche questi l'haverebbe esseguito con soverchio riore, con dispreggio delle Chiese, e con danno & ingiuria di Christiani, com'era avvenuto la volta passata.

そして Shimandono も、それ〔教会の破壊〕をすぐに実行する恐れがあった。Don Protasio〔有馬〕と、Don Sancio〔大村〕は P. Visitatore に手紙を書き、今、幕府に起きていること〔弾圧の恐れが出てきていること〕についてそれを説明し、知らせた。そして司教にも同じように手紙を書いた。手紙の内容は Daifusama の命令で、Shimandono が教会を破壊する前に、自分たちの手で、自分の教会を破壊した方がいい、ということであった。なぜかという、Shimandono は冷笑を浮かべ、壊すことで欲を満たすからである。

ma facendosi questo dasuoi vassalli, tutti i sudetti inconvenienti sarebbero cessati: alcune Chiese ancora si sarebbero in maniera accomodate nell'esteriore, che non sarebbero state giudicate per tali.

Don Protasio と、Don Sancio の家臣に破壊を行わせることは、Shimandono のそのような冷笑を避けることができ、また、教会の外側を破壊し、意味のない建物だと思わせることが可能になるからである。

これらの記述からは以下のことが考察できる。まず、当時のキリシタン大名や民衆の教義の理解が、かなり高いものがあった可能性である。聖書には以下のような問答がある。

イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」それでユダヤ人たちは、「この神殿は建てるのに46年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか」と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた（ヨハネ2：19-22）。

ここでいう「神殿」とは、第一にイエスの体のことであり、そのキリストに結ばれている私たちの体こそが神殿であり、建物自体が大切なのではない、ということである。つまり、大名たちはこの聖書の言葉を理解し、信仰を守る代わりに、教会の破壊を決断したと考えられる。このことから、当時のキリシタンたちの教義に対する理解は深かったことが分かる。

また、この記述からは、かくれキリシタンたちの言い伝えにある、潜伏期の役人の「逃がし」につながるものが、この時代から行われていたことも分かる。かくれキリシタン信者の中には潜伏期の取り締まりについての言い伝えがあり、筆者も聞き取り調査の中でこのような伝承を採集したことがある。それは、「ここは、江戸時代は村全部がキリシタンだった。役人から、百姓まで。だから、絵踏みの時も皆を集めて、形だけやって、幕府にはこの村にはかくれキリシタンがいない、という報告をしていたといわれている」というものである。これまでは「ただの言い伝え」として人々の間で語り継がれてきたものであるが、このように役人が形だけの弾圧を行った、という資史的裏付けは、彼らの言い伝えや伝説に関する信憑性を高めるものであるといえよう。

④ 幕府はキリシタンたちの処刑を決めたが、ここで考えられることは、幕府の目的は「殺すこと」ではなく「生かすこと」であったということである。この文章の前文には、キリシタンたちが江戸じゅうを引き回され、かなりの距離を歩かされたこと、また、道中で役人により棄教するよう迫られている様子が記されている。また、棄教を宣言するものが1人だけおり、彼は実際に役人の手によって縄から放たれ、命を落とさなかったことを知ることができる。幕府としては、民衆を殺すことには若干の躊躇<sup>ためら</sup>いがあったのだろう。長い距離を歩かせ、江戸の町並みや、街道に集まった人々と会わせることで棄教させることが大きな目的であったと考えられる。また、このように多くの人々にキリシタンの処刑現場を目撃させることはさらなるキリシタンの増加も防ぐ役割も備えていたことが容易に考えられる。

「キリスト者として死ぬ」ということは②でも触れたように、当時のキリシタンたちにとっては教義上最高の最期の迎え方であったようである。そしてこれは事項⑤にて述べる宗教的教義に起因するものであると考えられる。

⑤ 聖書の中には以下のような言葉がある。

それから弟子に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失うものは、それを得る」(マタイ 16:24-25)

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」(ヨハネ 11:25-26)

当時のキリシタンたちはこのような聖書の言葉を信じ、死へと向かっていったのであろう。宣教師もが「死」を望み、死こそキリストと共にあると考えていたことも記述から見て取れる。宗教的指導者はキリシタンたちにこのような聖書の言葉を伝え、キリスト者として死に、イエスの傍<sup>そば</sup>へと行くことを促したのであろう。

また、この箇所には、ある夫婦が処刑を見て、自らもキリシタンであることを役人に告げ、投獄される、という記述もある。このこともカトリック的にいえば信仰の告白として、高い信仰心の表れとみられる。

以上の記述から、この1624年の段階では、信仰の告白を行う者や、棄教を迫られても応じない者が数多くいたということが分かる。弾圧が激化する中で、キリシタンたちは身を守るため「許しのおらしょ」などを生み出し、神への許しを乞うた。このおらしょは、例えば絵踏みなどで自身の命を守るために聖画や十字架を踏んでしまった時に、神に許しを請うためのものである。記述を読む限り、この時代にはまだそのようなおらしょは創作はされていないことがうかがえる。そのことから、許しのおらしょは潜伏期に作られたものだと考えられる。

しかし、神への罪の告白とそれによる許し、という一連の流れこそがキリスト教の信仰の在り方であることも確かである。許しのおらしょが生まれたのは、その言葉の訛り具合から宗教的指導者の消失後であると推測されるが、宗教的指導者のいない中、自然とキリスト教本来の「許し」という信仰の在り方に潜伏キリシタンたちがたどり着いた、ということは興味深い。

⑥ この記述からは当時の「宣教の方法」と「信徒たちの様子」について知ることができる。まず注目したいのは、異教徒(キリシタン以外の日本人)はその遺体を目につくところに置きたくないため、Gabriareとその妻の遺体を覆おうとした場面である。記述によると、そのとき妻にはまだ命があり(命を切り取られてはおらず)、イエスとマリアの名前を言い続けていたという。そして宣教師はこれを「奇蹟」であるとしている。ここでは無論、死を超越するというイエスの教えが実践されたことが示されている。この記述以外にも聖書の教えとの対応が見られる事例を多く発見することができたが、このことから、当時の宣教師たちが、迫害での出来事を聖書から解釈することで意味付けし、残った信者たち、さらには自らの信仰心の支えとしていたことが分かる。

そして、その次に続く異教徒側の対応は、当時の「日本社会の様子」を知る上で参考になる。異教徒は、首を切られてもなお生きていることに驚き、その首をもう一度切った。そして遺体を一つずつ袋に入れ、海に投げたが、その理由を、遺体をキリシタンが拾って、遺体のために祈らないようにするためであったと記述している。この文章を書いているのは宣教師であるため、この理由が事実であ

るかは不明であるが、この記述に拠るならば、当時のキリシタン以外の人々は、キリシタンが「遺体のために祈る」者であること、そして遺体が信仰対象となりうることを知っていたことになる。無論、遺体が信仰対象になりうるということは、御霊信仰や即身仏信仰から類推できることではあるが、この行為は、既に日本のキリシタンの間で聖人信仰が出現していたことを示しているとも考えられる。ゆえにこの文からは、当時の「宣教の方法」「日本社会の様子」「信徒たちの様子」について知ることができるのである。

⑦ ここでは、キリシタンが従来の慣習に囚われない生活をしていたことが記されている。この生き方は、従来のユダヤ教の慣習に縛られないイエスの生き方を想起させるものであり、このことは、当時のキリシタンが日々の生活を送る上で、イエスの生き方を指針にしていた可能性を示している。

## おわりに

ページの関係で、ここでは特徴的な七つの事例を挙げることはできないが、例えば筆者による研究発表“The Transformation of Kakure Kirishitan Faith in Modern Times: Merits and Demerits in the Activity for the Inscription of World Heritage Site”<sup>(4)</sup>でも述べたように、潜伏下のキリシタンたちは、自身ら独自の伝承方法や解釈によって、信仰の保持を行っていったことが分かる。

また、本論文での分析から、従来のキリシタン信仰史の区分の再考を促すことができる。本論文で扱った時期は、前述の区分でいう「キリシタン期」と「潜伏キリシタン期」の中間の時代である。キリシタン弾圧が始まる中、信仰を隠す者と「信仰の魂を見せる」とし、信仰を告白して、処罰される者などが入り混じった時代である。そのような歴史的背景を持つ時代であるため、本論中で扱った時代を、「過渡期」という一時代と考えることもできるのではないだろうか。その大きな理由は次の三つである。

- ① 宣教師が日本国内におり、まだキリスト教を聖職者から直接伝道されている第一世代であること。
- ② 報告者が“Chiri[s]tianiti”「キリシタン」と当時の民衆を呼んでいること。
- ③ 「潜伏」の要素がまだ薄いこと。

このように、宣教師の書簡研究は、従来のキリシタン信仰史に新たなアプローチを可能にするものであるといえよう。折しも、2017年1月21日に遠藤周作の小説『沈黙』をマーティン・スコセッシ監督が映画化した『沈黙——サイレンス——』が劇場公開され、キリシタンの中でも、特に江戸期の潜伏キリシタンと宣教師との関係について国内外で注目が集まりつつある今、17世紀当時の信者と宣教師についての正確な知識は、今後この文化の世界遺産への登録を推進する上でも重要になってくると思われる。<sup>(5)</sup> 宣教師たちが潜伏下のキリシタンとどのように向き合い、伝道を行ったのかを明らかにした本研究は、それゆえに、キリシタン研究という領域にとどまらず、今後のキリシタンに関する認識をより事実に基づいたものにするための第一歩であったといえる。この研究を今後論文その他

の媒体によって公開していくことが、本研究の社会的還元になるだろう。

## 付記

本論文は『比較民俗研究』第30号において「“Lettera annua del Giappone”からみる当時の状況の考察」(2016)と題し執筆した研究ノートに、その後の研究成果を加筆訂正し、論考を進めたものである。

本論文執筆に際しては、“Lettera annua del Giappone”の翻訳は必要不可欠であった。この翻訳に際しては筆者の敬愛する友人である、Francesca Mortaraの助けなしには進めることができなかった。彼女の適切な助言と翻訳確認に、大きな感謝を述べたい。

Inoltre, per completare la presente testi mi era indispensabile la “Lettera annua del Giappone”. Non avrei potuto proseguire senza l'aiuto di Francesca Mortara. Vorrei ringraziarla per I suoi consigli pertinenti e per la revision della traduzione.

## 注

- (1) 寛永10年(1633年)、寛永11年(1634年)、寛永12年(1635年)、寛永13年(1636年)、寛永16年(1639年)の計5回である。
- (2) 以下に掲載する原文は、次の五つの凡例に基づいている。
  - ① 原書において‘(手書き挿入)’の文字は現在のイタリア語では使用されておらず打ち込みができない。そのため[S]のように表記を行った。(例: Chri○tianiti→Chiri[s]tianiti など)
  - ② 古イタリア語は現在使われていないものも、原書に忠実に表記を行った。(例: haueua/habbiamo など)
  - ③ ②と同じ理由で現在のイタリア語における表記での「V」が「U」として表記されている。これについても原書のままの表記とした。(例: annua など)
  - ④ 人物の名称は、翻訳文の中でもローマ字表記とする。(例: S. Domenico/Ilario Mongazaiemon など)
  - ⑤ 原書中の「&」は「e」(英: and)の意味である。
  - ⑥ 本文中の亀甲括弧〔 〕は引用者による補足である。
- (3) 家で隠れて信仰を行っていた、という意味であろう。
- (4) ドイツ民俗学会・日本民俗学会共催国際学術研究会“Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany”、2016年10月29日。なお当シンポジウムでの発表内容は、ドイツにて論文集として出版予定。
- (5) 2018年6月世界遺産に登録された。

## 主要参考文献

- 片岡弥吉 1967 『かくれキリシタン——歴史と民俗』日本放送出版協会
- 小泉優莉菜 2015 「長崎県生月島におけるかくれキリシタンの「唄おらしょ」——生月島山田地区の事例研究——」『年報 非文字資料研究』11
- 宮崎賢太郎 2004 『カクレキリシタン オラシヨ——魂の通奏低音』長崎新聞社
- 村上直次郎訳、柳谷武夫編 1969a 『イエズス会日本年報』上(新異国叢書〈3〉)、雄松堂書店 1969b 『イエズス会日本年報』下(新異国叢書〈4〉)、雄松堂書店